

北の海と
生きる

漁師といふ人生

夢は家業と家族の愛



百年に一度の危機：

アメリカ発の金融危機は世界同時不況の引き金となり、この今の日本も「百年に一度の危機」といわれ、恐慌前夜のような不安が社会全体を覆っています。

日本国中が浮かれた「バブル景気」（昭和41年～45年）を抜く記録的な好景気と言われていますが、北海道など多くの地方や庶民には実感がないことから「無実感景気」とか「格差型景気」「リストラ景気」「円安景気」「かけろう景気」というエコノミストもいます。

ともあれ、最長の「いざなみ景気」を演出牽引してきたのが、日本の輸出関連産業です。従業員より株主重視のアメリカ流ビジネスモデルで世界中に輸出攻勢をかけて、会社を繁栄させてきました。

ところが、今の日本は「派遣切り」など雇用不安が社会問題化しています。会社の繁栄だけでなく、雇用不安もアメリカ流の結果なのです。派遣社員の数はドイツが70万人、フランス60万人なのに対し、日本は380万人といいますから、「いざなみ景気」は国民の多くを幸せにしたとはいえない。

世界同時不況で、「いざなみ景気」の輸出を牽引した自動車、電機、それに鉄鋼や化学など素材メーカーも巨額の赤字決算が相次ぎ、経費削減のため派遣社員だけではなく正規社員を含めた大リストラが進行しています。

世界の人口増、中国やインドなどの経済発展で、食料の需給はますますひつ迫します。日本は六兆円もの食料品を海外から買い付けている輸入大国で、食料の自給率はわずか40%にすぎません。これまで、輸出で外貨を稼いでいましたから必要な輸入が可能でしたが、近年は国民の購買力の低下を反映して海外での「買い負け」が相次いでいます。

ですから、食料自給率のアップは日本の国家的課題で、漁業生産の現場ではバイタリティのある若くて優秀な担い手が求められています。漁業は、国民が健康的に生きていぐ上で必要な食料を提供する重要な産業で、漁師はやりがいのある職業です。

この日本を、そして世界を救う 漁師といふ生き方

そして、全国各地で失業相次ぐ雇用不安の国難です。

この百年に一度の危機は社会全体に波及しつつあり、多くの国民

にとつて実感の薄いピークを越えてしまった、つまり日本は百年に一度の分水嶺を越えてしまい、未知の

自然循環を体感して生きる

新たな時代へ移行しつつあるよう

輸出関連産業の派遣切りやリストラに伴う雇用の縮小と不安により、北海道漁業就業支援センター

漁師はやりがいのある職業

アメリカ発の金融危機は世界同時不況の引き金となり、この今の日本も「百年に一度の危機」といわれ、恐慌前夜のような不安が社会全体を覆っています。

アメリカ発の金融危機は世界同時不況の引き金となり、この今の日本も「百年に一度の危機」といわれ、恐慌前夜のような不安が社会全体を覆っています。

（昭和41年～45年）を抜く記録的な好景気と言われていますが、北海道など多くの地方や庶民には実感がないことから「無実感景気」とか「格差型景気」「リストラ景気」「円安景気」「かけろう景気」というエコノミストもいます。

ともあれ、最長の「いざなみ景気」を演出牽引してきたのが、日本の輸出関連産業です。従業員より株主重視のアメリカ流ビジネスモデルで世界中に輸出攻勢をかけて、会社を繁栄させてきました。

ところが、今の日本は「派遣切り」など雇用不安が社会問題化しています。会社の繁栄だけでなく、雇用不安もアメリカ流の結果なのです。派遣社員の数はドイツが70万人、フランス60万人なのに対し、日本は380万人といいますから、「いざなみ景気」は国民の多くを幸せにしたとはいえない。

世界の人口増、中国やインドなどの経済発展で、食料の需給はますますひつ迫します。日本は六兆円もの食料品を海外から買い付けている輸入大国で、食料の自給率はわずか40%にすぎません。これまで、輸出で外貨を稼いでいましたから必要な輸入が可能でしたが、近年は国民の購買力の低下を反映して海外での「買い負け」が相次いでいます。

ですから、食料自給率のアップは日本の国家的課題で、漁業生産の現場ではバイタリティのある若くて優秀な担い手が求められています。漁業は、国民が健康的に生きていぐ上で必要な食料を提供する重要な産業で、漁師はやりがいのある職業です。

す。しかも、漁師とその家族の生活がありますから、漁業経営とリンクさせていく必要があります。

漁師は毎日、自然と真剣に向かって生活しています。すべての生命数は、40億年の時間を背負っています。平等な存在だと感じています。

工夫しても努力しても生産の好漁と不漁の波はありますが、それは自然の循環による変化です。加えて社会経済の循環で魚価の波もあります。波は直線的に動くのではなく、山あり谷ありで動いていきます。漁師とは、自然の循環そして社会経済の循環を日々体感して受け入れる職業です。そうした変動の中で、『幸せ』を追求しますから、家庭と家族を何よりも大切にします。家族の幸せが→地域→国家→世界へと広がると最高ですね。

確かに、漁労技術をマスターすれば、一網打尽に魚を獲り尽くす漁業なら可能でしょう。しかし、そんなことを何年も続けさせてくれるほど、自然は寛容ではありません。人間も魚貝藻類も自然サイクルの一部なのは、説明するまでもありません。人間の生きる糧でもある魚貝藻類の再生産を維持しながらの漁業生産には知恵がいります。

産業でマニュアルどおりすれば商品ができるような仕事では、まったくありません。家庭と家族を何よりも大切にします。家族の幸せが→地域→国家→世界へと広がると最高ですね。

しかし漁業就業希望者に、漁師という職業を、すでにある会社に就職するような感覚で安易に考えている人が多いのも現実です。そこで、誠意でボランティア的に研修指導を受け入れてくれている五人の漁師の親方に、道支援センターのアドバイザーが巡回の際に電話をお聞きしてまとめたのが、このパート2です。

漁師という職業に、ますます魅力を感じたら、当セントナーまで連絡してみてください。じっくり相談に乗ります。



への問い合わせが増えています。

漁業に素人しろうとでも、若くて意欲的

な人なら何人でも大歓迎です。しかし、漁業を派遣職のように安易に考えている人も少なくありません。

地域の一員として働き、地球の自然環境と共生きょうせいして、幾世代も家族を養っていく漁師という職業は、派遣切りされる職種とはまったく違います。

スーパーやコンビニのレジでバーコードをなぞるような、工場や外食

浜から『幸せ』の発信を

アメリカ流や都市部の技術や環境では幸せになれないことに、多くの人々が気付き始めています。ですから、自然環境豊かな北海道の浜から漁師が『幸せ』のあり方を、

都市部や世界へ発信する時代なかもしれません。漁師や浜は、決して排他的では

共生しない、資源略奪的な良いを感じる場合には身構えます。漁師はそもそも魚や幸せを求めて、他の地区から来て住みついたので、自分と同じ匂いがすれば、すから、自分と同じ匂いがすれば、都市部の人間であっても拒みません。むしろ大歓迎で、手を差し伸べてくれるはずです。さらに、外からの刺激による創造性を期待しているのです。

浜で仲間が認める本物の漁師になれば、いま社会問題になっている派遣切りやリストラなどの不安は無縁です。

北海道で漁師になりたいという人のために、研修中の新米漁師を紹介する冊子を2年前にパート1としてつくりました。

しかしながら、漁業就業希望者に、漁師という職業を、すでにある会社に就職するような感覚で安易に考えている人が多いのも現実です。

そこで、誠意でボランティア的に研修指導を受け入れてくれている五人の漁師の親方に、道支援セ

ターのアドバイザーが巡回の際に電話をお聞きしてまとめたのが、このパート2です。

漁師という職業に、ますます魅

力を感じたら、当セントナーまで連絡してみてください。じっくり相談に乗ります。

漁師という人生

夢

せたな町瀬棚区 真藤 誠さん――

父の漁師魂を次の世代に

を考えた。

養殖の仕事は、同じ作業の繰り返しを黙々と続けなければならぬ。網を揚げると、魚が掛かっているとは全く違う。自分の性格に合わないとも思つたが、奥さんが「私は農家の生まれだから、養殖の仕事は苦にならないよ」と淡々と手伝つてくれる姿に勇気づけられ、再びチャレンジした。養殖技術の改善に独自の工夫を凝らし、難局を乗り切つて軌道に乗せた。それを見ていた周囲の漁師仲間も、ホタテ養殖を開始した。

ヤマヨ斎藤漁業部の当主・斎藤誠さん(59歳)は、祖父の代に「シン」を追つて瀬棚に居を構える三代目の漁師。

父の後ろ姿を見ながら成長し、高校を卒業して迷いなく父の船に乗つた。当時は底建網、タコ箱漁にイカ釣漁で生計を立てていた。父から23歳で船を任せられた。瀬棚は、岩礁と砂浜の前浜、沖は潮流の速い日本海で、大漁が期待できる漁業がない。そんな中で借金ゼロの堅実経営をしていた父は「チャレンジは結構だが、借金をしてまではするな」が経営理念だった。

「營漁^{（えりよぎ）}」を任された斎藤さん。その頃、噴火湾や増毛などがホタテ養殖で安定した経営を営んでいることを聞きつけ、瀬棚でも実現できないか研究に着手。漁業研修所でつくり育てる漁業を学び、増毛や室蘭の親方に飛び込みで技術指導を受けた。瀬棚で採苗や稚貝の分散、成長に応じての籠育成と手さぐりでホタテ養殖を始めた。瀬棚沖の潮流は速い。育成中の籠が吹き流しのように漂うのも他地区と違つた。日本海南西沖地震など一度の津波で施設が全壊し、育成貝の全滅も経験。ホタテ養殖の断念

斎藤さんには長男の正人さんと二男の直人さんの二人の息子がいる。二人の中から跡継ぎをと考えていたが、直人さんが四代目継承の意志を持ち、高校を卒業して専門学校に進み、瀬棚に戻つて来て斎藤さんと沖に出るようになった。正人は大学に進学し、札幌の商社に就職した。

瀬棚のホタテ養殖には、他地区にはない優位性がある。速い潮流が貝毒のない活力ある貝柱を成長させ、周年出荷が可能なことだ。他地区の端境期でも出荷できるためホタテの産直販売を考えていたら、商社マンの正人さんが戻ってきた。インターネット販売を提案し、斎藤漁業のホームページを立ち上げてしま



向かって右から、誠さん、直人さん、正人さん

つた。斎藤さん夫婦もデパートやイベントに出店し、消費者の感触を直接確認することに努めた。

家族みんなで夢を追う

正人さんも瀬棚に戻ってきて、産直事業に本格的に取り組み始めた。新千歳空港や全国展開する有名デパートにも常設コーナーが設けられるようになつた。ネット販売のために加工部門も必要となり、加工場を設けた。地元のイベント朝市・夕市にも出品して地域の行事を盛り上げる。夏の一過性行事に終わらせたくない、町から直売店開設の依頼。磯と国道229号に面した土地を購入し、加工場と併設の『漁師の直売店』を開業した。この直売店では、ホタテのほかに斎藤漁業の定置網や底建網で水揚げされる魚介類のほか同僚漁師の水揚げ品の販売も引き受けた。生産・加工・販売の各部門に必要な人材は地元の人たちにお願いし、二十人といふ新たな雇用の場が生まれた。

斎藤さんは「失敗を恐れてはいけ



イース札幌店

環境を守り、人を育てる

斎藤さんは、北海道漁業士会の会長を務めている。漁業士は地域のリーダーとして認められ知事から称号を与えられているが、具体的に何をすべきなのかが皆の悩み。

斎藤さんは地域に貢献することを摸索し、漁師を続けていく上で大切な環境の保全に取り組むことを仲間に提案。「我々が子どもの頃、川には小魚や昆虫などがたくさんいたが、他人の失敗から学ぶべきことが大きい」とも。読書好きの斎藤さんは様々なジャンルの本や雑誌を読み、仕事のアイディアも人生哲学も学びしていく。そうして十分にリスクも検討した上で、家族がつになり夢に向かつてスタートを切るのが斎藤さんの手法。平成20年11月21日にオープンしたイーアス札幌に出店した。「7年から計画していた札幌進出がようやく実現したよ。これまでお世話になってきた瀬棚への恩返しを込めて、瀬棚の浜と札幌をつなぐ直売店にしていきたい。これまで瀬棚から札幌まで貨物の直行便が無かつたが、これから毎日我が家の定期便が走るので、瀬棚と札幌市場を結ぶ貨物便として地元の人を利用するとしてほしい」と、斎

藤さんは夢実現を話している。

斎藤漁業の経営の特徴は、事業の新展開や拡充するときに、家族会議を行うことだ。長男にも次男にも家族があるし、すべての家族にとって最善の方法、最善の時期に前進させることにしているとのこと。

斎藤さんは「失敗を恐れてはいけ



地元の直売店前で家族と

「これからは漁師を育てたい」と言う。「人はやろうと思えば大概のことはやりこなせるが、漁師だけはセンスと根性の両方を兼ね備え、人立ちをするには十年はかかる。今から育てていかなければ漁業と浜を守る人材はいなくなる」と、北海道水産会の漁業就業支援センターとのコンタクトとともに、斎藤漁業の門を叩く人を拒まない。

夢

ホタテ養殖発祥の地 の誇り

伊達市西浜町 伊藤 幸博さん

大切なことは伝わる

伊藤幸博さん（48歳）は、漁師である父・幸治氏の背を見て育った。

幸治氏の父親は若くして他界し、家業を継いで兄弟を養育しなければならなかつた。そうした事情にあつても幸治氏は「子どもは親の持ち物ではない。やりたい職業を自ら探すのがいい」と家業を継ぐことを強制したことはなかつた。幸博さんも男三女の父親だが、子どもの将来は自分で決めさせている。

幼い時分から幸博さんの遊び場は磯で、母の仕事を手伝いながら、浜で生活する意味と意義を自然に身に付けていった。

高校進学のときに「漁師になりたいなら水産高校を出ておくように」と父にアドバイスされた程度だと言う。幸博さんは父の仕事を手伝いながら「俺は漁師向きかな」と考えるようになり、小樽水産高校に進学した。「漁師になるなら上級資格を取つておく方がいいぞ」と父からアドバイスされて専攻科に進み海技免許を取得。卒業後は小樽と離島の利礼間を結ぶフェリー航路の航海士として就職した。八年に及ぶ航海士の仕事。その間に離島ブルムに乗つて稚内へ利礼航路開設の準備が進められ、幸博さんは運行の効率性から勤務する航路廃止を悟つて退社し、実家に戻つた。



父の想いのこもったアルミ船

幸治氏は、息子と一緒に漁業ができるのやうれしく思つたが、息子が家族共々幸せになれるのか悩んだそうだ。幸博さんと奥さんは高校時代からの付き合いで、学生時代や結婚後も伊達に遊びに来るたびに浜で仕事を手伝つていたから、漁師の女将さんになることを自然と受け入れられたという。

幸治氏は、幸博さんに漁業の手ほどきはせず、幸博さんが工夫を重ねながら覚えるのに任せた。幸治氏は「次の世代を背負う者に自分のやり方は古いかもしれない。まつさらな状態なのだから、自分で仕事を創造すれば良い。新しい感覚と、自分の仲間や相談相手をつくつていくことが大切」と、その時の思いを話してくれた。幸博さんにもこの思いが伝わつていて、漁師志望の



ホタテ養殖発祥の自負も継承されている

若者には「漁業について何も知らない」ともい。知りたければ伊藤漁業のやり方はすべて教えるので、真っ白なキャンバスに描く方が伊藤漁業の継承は早い」と理解させ受け入れている。

伊藤さん親子は、ホタテ養殖作業の効率性を高めるため現在のアルミ船を建造した。これまで幸治氏が使用してきた船を廃船すると、ブリッジ内で書きためた操業記録ノートすべてを幸博さんに渡した。幸博さんはその時の心境を「あの時、父から財産すべてを継承されたと心底思った」と話す。父のそうした財産を受けた幸博さんも、作業日記を毎日つけており、最近はパソコンにデータとして残している。幸博さんは「日記は海と作業の記録。毎年の変化と作業進捗を確認することができるので貴重なデータになるので、どんなに体がきつくとも書き残しておこう」と漁師志望で研修に来る者に繰り返し言い聞かせている。

父の遺志を継いで

伊藤幸博さんは、宮城県亘理町から祖父の代に伊達に移住した三代目。現在、家業はホタテ養殖を中心とし、秋サケ定置網漁と底建網漁を営むが、父・故幸治氏（いぶり噴

火湾漁協組合長、北海道漁連副会長、北海道信漁連理事）が礎を築いた。

ホタテ養殖の技術は伊達の前浜で開発された。だが、伊達の砂浜地帯は天然ホタテの漁場として利用されていたためジョレンを曳くのに邪魔となる養殖施設の設置を断念し、豊浦に移転した経緯がある。だから、伊達地区にはホタテ養殖の発祥地の自負がある。また、かつてオホツク海の猿払が地蔵（わらま）で漁業再生を計画し、伊達を視察して支援を求めたときに、稚貝を虻田に集めて送り手助けをした。その経緯から今でも稚貝出荷が行われている。

歴史あるホタテ養殖漁業だが、幸治氏が伊達漁協の組合長時代から地域の基幹漁業で高齢化や後継者難を理由に廃業者が増え始めていることを心配し、衰退防止のため共同経営や協業化を提唱していたが、個人財産の共有化や親方と呼ばれることへのこだわりから構想は進まなかつた。これには、伊達市が札幌市に近く、室蘭市や登別市、洞爺湖温泉に隣接した地方都市であるため、二次や三次産業へ後継者が流出しやすい地域で、また仕事が得やすかったこともある。

就業者の減少は伊達地区にとどまらず全道的な問題で、北海道水産会は、道庁の就業者対策の受け入れる。

皿として委託を受け、協業化や共同化、法人化の可能性を模索する中で就業者の確保育成モデル事業を行っていた。こうした背景があつて、やがて幸治氏と幸博さんを交えた漁協、伊達市、道庁と水産会の話し合いの場がもたれ、モデル事業の新規漁業就業者育成を引き受ける漁家となつたのである。



研修青年にサツマの入れ方を現場で指導

自然は嘘をつかない

「自然は嘘をつかない」が、幸治氏と幸博さんの口癖である。努力をすると応えてくれるし、手抜きをするとそれなりの物しか得られない。若者を育てるとき必ず話す言葉だ。

漁業という職業を軽視する者が多い世相。学歴社会で育った者の目には「敗者」としか映らないのかもしれない。「漁師になりたい」と連絡してくる者に理由を聞けば、多くは「漁師しか残っていない」と答

しかし、漁師ほどやる気とセンスと科学する力を身に付けなければ成り立たない職業はない。気象も中で就業者の確保育成モデル事業を行っていた。こうした背景があつて、幸治氏と幸博さんを交えた漁協、伊達市、道庁と水産会の話し合いの場がもたれ、モデル事業の新規漁業就業者育成を引き受ける漁家となつたのである。

心を要する。生物相手だから自己規律も身に付け情報を貪欲に集める努力も必要だ。これらの総合力に、人と自然に対する謙遜さと慈愛が備わると経営者として尊敬される。それが父から継承しさらに磨きをかけよう努めている人生哲学だ。日々新しい自分を求めて。昨今の若者には厳しく映り聞こえるかもしれないが「漁師がしたい」のか「漁師をしたい」のかでは向かうところが違うと言いかける。幸博さんは「楽をするところに金は無い」「苦勞は財産、他に逃げてはいけない」と、父幸治氏を手本に。現在、「漁師になりたい」と東京での面談会で飛び込んできた神奈川県出身、東海大学卒業二年目の瀬戸朝陽さんを浜の後継者として育成中。また、安定した経営と経営継承、従業員の福祉向上などを考え、父から家督を継承したのを契機に法人化を本格検討、平成21年にマルサク伊藤水産株式会社としてスタートした。この準備中の19年12月に幸治氏が急逝したことが惜しまれてならない。

夢

礼文町香深村尺忍 金田一誠さん



金田一誠さん

漁師になるまでの道程

金田一誠さん（62歳）。香深で採介藻漁業を営む漁師の息子として、昭和21年に生まれた。地元の中学校卒業して上京、プラスチック成型の大手積水化学に就職したのが同36年。日本経済は高度成長期に入り、農漁村から中卒者が金の卵として都会に流出していく時代である。

十年の都会生活に見切りをつけ故郷に戻ったのが25歳。ウニ・コンブ、タコいさり漁を父に本格的に習い漁師を目指した。「幼い頃から親の姿は見ていたが、人並みに採れるようになるには、なかなか大変な修行だった」と当時を振り返る。漁業に従事してから三年目に組合員の資格を得た。

採介藻漁業は、冬は漁ができない。この時期は父と一緒に知人の漁船に乗り組み、刺網やタラ釣り漁などを手伝つて収入を得た。約五年間続けた修行時代の話だ。

コンブ養殖への挑戦

した。金田一誠さんも父と共に共同事業に参画したが、成長に二年を要する養殖の技術習得と、厳しい気象海象に耐える施設強度の解明など、先例を超える管理技術を習得するのは大変な苦労だった。

昭和60年、父が他界したのを契機に、本格的にコンブ養殖に仲間と共に取り組んだ。しかし、相次ぐ台風や時化で施設補修費が嵩み、コンブ養殖から離脱する人が相次いだ。二十人いた仲間も七人に。この頃になると個人の新規養殖施設整備に国の助成が得られるようになり、思い切ってコンブ養殖専業に切り換えた。

五年前と四年前、二年連続で台風に見舞われ、施設が大きく損壊。十トンブロックの基礎が移動し、養殖施設の型が壊れてしまつた。事業の継続をあきらめることも考え甚大な被害だった。しかし、これで人生を終わらせたくないと挑戦意欲が強烈に湧いてきて、施設の強化、復旧に千万円の借金をして再開した。養殖規模を拡大すると、陸上では必然的に干場が必要になる。山が海に迫り出している礼文島は干場になる平地が少ない。作業室・乾燥室・倉庫を兼ねた二階建ての作業場も建設した。隣接の採苗施設を含め効率的に基本施

設が配置されている。自宅前の前浜には干場と作業場があり、細心の製品づくりで一等コンブ量産を目指している。

良き友は素晴らしいライバル

金田一さんの「無二」の親友、二歳下の弟の同級生で小学校時代から遊び仲間であった香深井に住む長谷川好美さん。金田一さんが帰郷してからは互いに漁師仲間として、さらに親交を深めていった。一人の酒豪ぶりは漁師仲間で知らない人はいない。金田一さんの奥さんは香深井の人で長谷川さんの紹介。帰郷した金田一さんは標準語で話すシティボーイ。奥さんは島に出張で来ている商社マンと思い込んで結婚、いま



礼文から見る利尻富士

だに騙されたと言っているという。

金田一さんは「漁師」とは一度も言わなかつたそうである。

長谷川さんは、かつて刺網漁にかけては名売れの漁師で、宗谷では

勿論のこと留萌管内まで知らない

人はいない。しかし、操業中の怪我

で漁船漁業をあきらめ、コンブ養殖に転換した。今は金田一さんと島で、二位を競い合うコンブ漁師である。

後継者のいない長谷川さんは、東京出身の百瀬自行さんを仕込んで五年になるが自立するまでに育てた。金田一さんも二年前から漁師志望の大坂出身の大倉浩平さんを後継者として育てている最中だ。

努力こそ夢をかなえる

平成20年は、金田一さんと大倉さんの「一人にとって壮絶なシーズン」となった。2月に大阪に帰省した大倉さんはオートバイで転倒して足首を骨折。金田一さんは体調の異変を感じて検診を受けたところ、胃にポリープ発見。進行性というので札幌の病院のベッド空きを待つて胃の全摘出手術を受けた。4月下旬からの養殖施設の管理と大倉さんの指導をコンブ養殖部会の仲間に頼み、治療に臨んだ。この事態に、役場や漁協など周囲の関係者は、心配しつつも一人の再起は難しい

だろうと話していた。

しかしながら、大倉さんはリハビリなしで5月20日に島に戻つて来た。

金田一さんも5月26日に退院するや28日から仕事を始めた。十三キ

口も体重が落ちた。

大倉さんの上達はめざましい。サ

ッカーデ鍛え百九十七センチを超える

体躯だが、船にはからつき弱かつた。

しかし、凛とした気概が漁師魂を

目覚めさせ、金田一一人で水揚げした前年をはるかに超える成果

を収めた。そして大倉さんは組合員になつた。金田一さんはお祝いに和船を贈り、町からは奨励金として五十万円支給された。大倉さん

はこれを資金に船外機や漁労道具を購入し、ウニやナマコ、天然コン

ブ採取できる漁師になつた。金田一さんの手ほじきは決して急がない。

金田一さんが身につけてきた業を、成長に応じて一つひとつ伝授していく。

それに応える大倉さんの上達も目

ざましい。

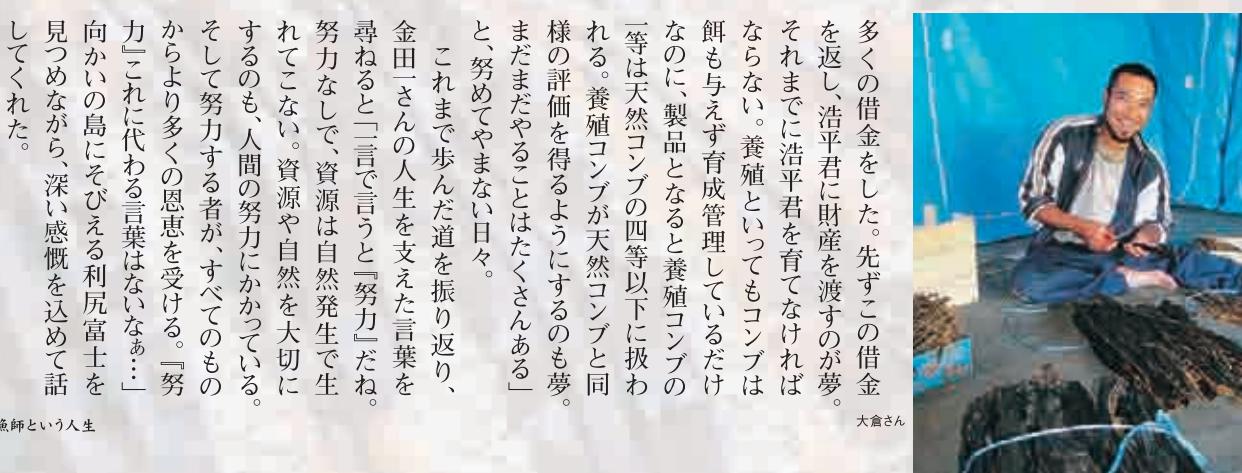
かつて金田一さんも部長を務めた漁協青年部に入つて仲間づくり

も始めた。部員の大半は「ターンや

Uターン者が占め、既存の枠にとらわれない活動と交流を行つてゐる。

そんな大倉さんたちを金田一さんは喜び、そつと支えている。

金田一さんは「施設を整えるのに



大倉さん

夢

自然体で若者を育む

利尻富士町鬼脇

佐々木 勝さん



左から3人目が石井さん、次いで佐々木社長、安田さん、佐藤さん

最北でホタテ養殖を開拓

利尻・礼文両島にも天然ホタテガイは生息しているが、自家消費程度。両島の商業ベースのホタテ需要は、佐々木勝さん（52歳）一人で賄つていて。利尻島で共に生産していた七軒あつた同業者は平成19年までに廃業し、残るは勝さん一軒になってしまった。

勝さんの漁師第一歩は、島の多くの漁師がそうであつたように中

学を出てから漁業と出稼ぎの兼業だつた。島でホタテ養殖が始まったのは二十二年前、勝さんが30歳の時だ。オホーツク外海増殖の種苗需要に伴い、青年部員十五人が共同で200m³三基の施設を使い、稚貝育成試験に取り組んだ。しかし、当時はウニ、コンブ、カレイ、オオナゴなどの資源が豊かで、陸でも条件の良い土木作業や出稼ぎ仕事があつたので、青年部の養殖試験は一年で頓挫してしまった。しかし、勝さんは「若いもんは新しいもの飛びつくのも早いが、投げ出すのも早いと言われるだろうし、一番悔しいのは投げ出してしまって自分自身」と、歯を食いしばつて養殖試験を続けた。

ホタテ養殖といえば、五トン型以上の動力船にクレーンや各種油圧漁労機器を装備して海上作業をするのはその時代でも普通だった。

軌道に乗せる努力

しかし、その頃の勝さんの持船は和船だけだったので、作業はすべて人力の手作業。十五段のザブトン籠の上げ下ろしも人力だったというから驚かされる。當時でも考えられない操業ぶりだったが、勝さんは「海とホタテとに真っ向勝負を挑んでいた」からこそ、島での養殖技術開拓を成し得たに違いない。

曲折はあつたものの、ホタテ養殖との出会いは漁師人生を変させた。和船と体一つでやり始めた養殖は五年後に小平町白谷から四・九トン型のFRP船を手に入れ施設規模を200m³十五基に拡大した。さらに、平成9年に岩内の造船所で第58北勝丸六・六トンを新造し、250m³二十五基の養殖施設体制を整えてオホーツクの頓別漁協に稚貝を安定出荷するまでになつた。決して順風満帆ではなく、低気圧被害でホタテを全滅させた経験もある。ロープ一本切れただけで施設がバランスを失い、連鎖的に籠が団子状に絡まり損壊したのである。復旧への費用や、心労は並大抵なものではなかつた。採苗不振の年もあるので、安定供給には多くの稚貝を確保し、多くの人手も必要。それを維持する月々の給料支払いに

は定期収入が必要となるので、成貝の周年出荷体制を目指した。

最北酷寒の地で活ホタテの周年出荷を可能にしたのが、勝さん自慢の『宝の水』。漁港の背後にある作業場の脇をたまたまボーリングしたところ地下30mで絶好の地層をヒットし、周年9℃の地下水海水を汲み上げることに成功。無酸素だから無菌であることが保健所の検査で証明。この地下水海水にエアを注入し、ホタテの蓄養水として使用。例え雑菌が繁殖しやすい夏場でも、酸素が豊富で無菌の低温蓄養水は貝に活力を与え「貝柱が縮まってサクサクしている」と好評だ。しかも、人工海水滅菌装置などの高額投資が不要で、真に『宝の水』と言える。道路改良で今は閉じてしまったが、島を巡る道道沿いに直売所を開いて観光客が立ち寄るスポットを作つたことがある。訪れた人がリピーターとなつて産直に発展し、活ホタテの注文は九州や沖縄からも寄せられ、食べる直前まで活であつたと人気が高い。



『宝の水』と佐々木さんの奥さん

浜の後継者を育てよう！

勝さんの本家は松前で藩公に仕える槍持の武家であつたという。お祖父さんが盃、利尻と北上し、鬼脇に定住した二代目の漁師。最近になって勝さんは、ホタテ養殖漁家が次々と廃業し高齢化が加速していく状態を見て、何とか浜の後継者育成に一役買いたいと考えるようになった。

「島は色々なところから来た人たちの集まりだから、島外からきても新規就業に違和感はないはず」と、北海道漁業就業支援センターに入漁家として申し込んできた。この二年間に支援センターで面談した三名の研修を受け入れている。

勝さんは「会社員で働いてきた者が『漁師』という道を進んでみ

よう」とやって来たのだから、漁師を全うさせてやりたい。しかし、やるのは彼らだから、彼らが納得することが大切」と指導を焦らない。「怒つたら萎縮したり慌てたりしてかえつて危険だ」と彼らの技量に応じた仕事を与えてくる。操船免許を取りつた一人は組合員資格を得て、コンブやウニ、ナマコを探つて収入を得られるようになつた。漁業で生計が立てられるよう漁船漁業の手伝いもさせているが、漁師仲間との交流範囲を広げてあげる配慮から

勝さんの本家は松前で藩公に仕える槍持の武家であつたという。お祖父さんが盃、利尻と北上し、鬼脇に定住した二代目の漁師。最近になって勝さんは、ホタテ養殖漁家が次々と廃業し高齢化が加速していく状態を見て、何とか浜の後継者育成に一役買いたいと考えるようになつた。

勝さんは「島は色々なところから来た人たちの集まりだから、島外からきても新規就業に違和感はないはず」と、北海道漁業就業支援センターに入漁家として申し込んできた。この二年間に支援センターで面談した三名の研修を受け入れている。

勝さんは「会社員で働いてきた者が『漁師』という道を進んでみよう」とやって来たのだから、漁師を全うさせてやりたい。しかし、やるのは彼らだから、彼らが納得することが大切」と指導を焦らない。「怒つたら萎縮したり慌てたりしてかえつて危険だ」と彼らの技量に応じた仕事を与えてくる。操船免許を取りつた一人は組合員資格を得て、コンブやウニ、ナマコを探つて収入を得られるようになつた。漁業で生計が立てられるよう漁船漁業の手伝いもさせているが、漁師仲間との交流範囲を広げてあげる配慮から



水産高校に進学した。漁師見習いの三人には「一人ひとりの個性に合わせて生業を選択してくれるとい」と彼らに任せている。お盆休みには友人も誘つて武藏堆付近までトローリングに出掛け、リフレッシュする。ホタテ養殖の拡大を、町や漁協から要請されているが踏み出さない。養殖の基本施設を公で整備してくれても、生産設備への投資や、人口が減少していく中での人材確保が容易でないからだ。周年、何がしかの養殖作業があるホタテ養殖は、根気と科学的経営能力を兼ね備えていなければ持続できない。

計画は綿密に、決して無理はない。むしろ周囲の人たちとの協調を大切にし、助け合いながら着実に歩を進めていると思われるのが勝さんの漁業のやり方と感じた。

勝さんに漁師という職業の意義を聴いてみると「サラリーマンだつて苦労はするさ。漁師だつて苦労はある。しかし、ホタテ養殖で悟ったことは、苦労した分、努力した分、自分の財産になるということ。これは本当だよ。家族に迷惑をかけると思うなら、何もしなけりやいい。家族が理解しあえば苦労の時も笑顔でいられる」。漁師見習いにも、勝さんの後ろ姿から読み取つてもらいたい。

夢

十年で十人の若者を育てたい

利尻富士町鬼脇

上田 隆司さん

パワフルな上田さん

バイタリティに富んだ人生

上田 隆司さん（46歳）、昭和38年、

東京オリンピック開催前年の生れである。家業は刺網や採介藻漁業

を営む漁師。稚内の高校を卒業すると家業を継がずに、地元の鬼脇漁協に就職した。そして購買部に

いた同い年の女性と職場結婚。当時は集落ごとに学校があつたので、隣部落にいた奥さんを知つたのは漁協に勤めてからで「子供が少なくなつたからか、学校が無くなつたから集落が縮小したのか、今は周囲から集まらないと学校が成り立たなくなつてしまつた」と、子供の頃を思い起こして地域が縮小していくのを心配する。

結婚したものの「漁協の月給では飯は食えない」と退職し、昭和63年、25歳で組合員となり本格漁師の道に。組合員になるまでの3年間は父の仕事を手伝いながら自立の時を待つた。

平成8年に四・九トン型の中古船を購入し、漁船漁業者として独立。これを契機に、それまで浜で常道だった刺網漁を「止め(泊)網」から「日網」に変えてしまった。父は操業経費とのバランスが取れなくなると烈火のごとく怒つたそうだが、止め網にかかつた魚は揚網までの間に鮮度が落ちて魚価低下の要因

になつてゐるし、時期になるとトドの襲来を受けて魚はトドの餌に、網はゴミにされていたのである。漁協職員時代に改革の必要性を感じたことを実践し始めたのだが、今日では日網はあたりまえになつているし、価格維持につながつてゐる。

また、島の周囲は多種多様な魚介藻類がとれるが、根付資源のみでは生計が成り立たず、刺網や釣りなどを組み合わせた複合経営に挑戦していく。コンブ・ウニ・アワビ漁、底建網漁、ホッケ・ガヤ・ソイの刺網漁、ナマコ柄引き網漁、コウナゴ敷網漁、タコいさり漁、カニ刺網(特別採捕許可)にコンブ養殖と、まるで漁業の総合商社。寝る間はいつあるかと尋ねたら、隆司さんは「笑しながら『忙しいのは夏場のコンブ漁の時期だけだ』と言うのだが、一年で長靴を三足は履きつぶすというから、半端ではない。



上田(左)さんと、現在研修中の山傭さん

地域のリーダーとして

鬼脇漁協の青年部に所属し、平成8年から五年間青年部長を務めた。

「何もしなければ地域は衰退の一途、可能性があれば何でも挑戦した」。観光資源のアワビの安定確保のため養殖試験に取り組み、その成果は全国青年・女性漁業者交流大会での発表につながった。また利尻コンブの養殖技術普及のため水産技術普及指導所を手伝つてVTRを制作するなど、常に仲間や地域に刺激を与え続けている。

平成13年に漁協の理事に選任され、さらに将来の中核的漁業者として同15年に青年漁業士に認定、21年には地域で青少年育成に積極的に取り組んでいる漁業者に与えられる指導漁業士の称号を知事から与えられた。20年1月には利尻四漁協が合併して利尻漁協が誕生したが、若きリーダーとして理事に選任されている。

若い漁師を育て地域を元気に

上田さんが漁業士として考えた地域活動は「漁師になろうと島外から来た若者を育てる」とだった。

そこで十年で十人を漁師として育てる目標を立てた。「鬼脇で十人の若い漁師が育つたら活気が出るぞ。家族ができると浜も一変する

だろうし、可能性はあるんだから」と十年先を想像しての夢を語ってくれた。

北の海を相手の商売は夏場の稼ぎが勝負。特にコンブ漁は水揚げしたコンブの干し上がりで製品の善し悪しの大半が決まる。「利尻コンブは天然物の天日干し」が伝統のこだわりで、日照との勝負。真夏のコンブ漁時期には島中の働く者は作業に当たる。役場職員も交番の巡回も頭数に入っている。秋から初冬まで、出荷サイズに揃える揃葉と呼ばれる製品づくりが日々と続き、製品の色艶・形・長さで等級が決まる。一年の収入がここで決まる。しかし、養殖コンブは、天然物に近づけても超えることができないことを悟り、省力(人)で効率的な製品づくりを目指し、来る日も来る日も努力を惜しまない。

「養殖コンブは水揚げが計算できるから経営計画をしっかりと持てる。新人に経営計画とコンブ養殖の生産技術を身につけるよう教えるが、一度教えた技術は翌年のその時期にならなければ出てこないので、一度で身に付けいかに理解したかも上達のポイントで、忘れないよう日記や日記を書くことを教える。また、二年間の生育期間を要するコンブだから、製品を出荷できるまで二年の待ちの時期をどう忍耐して生計

を成すかも漁師の分を育てるために重要な時。従業員でよいのであれば経営のこつも生産技術も教え必要はなく、一定の給料を支給していれば済むが、経営者を目指している者を育てているのだから、その人の成長を忍耐して待たなければならぬ」親方として辛抱も求められる。

さらに上田さんは、漁労機器や工ジンなど使用する道具類を自分で修理することを勧める。経費をかけない経営、自分の個性に合った道具で効率的に仕事をすることを体得するためだ。上田さんの娘婿も同様に鍛えている。歯を食いしばり、耐えて耐え抜いた生活や業は将来の肥やしと、自らの人生で体得した経営哲学を、体を張つて伝授している。

国と道庁との事業により、研修生をこれまで三人受入れている。彼らのために利尻富士町は新築の町営住宅を提供し磯舟を贈呈して、新人漁師が歩み出す最小限の準備を支援している。上田さんは、さら

に新人のコンブ漁師が自立するのに必要な、作業番屋や倉庫に利用可能なスペースを併せ持つ共同住宅を建設し、自立を目指す若い漁師に提供することを町に提案している。「職住一体となつた環境で、空いている時間に製品づくりや道具類の整備を行えるように」と。時間大切にするとともに、知らない土地で孤独に陥りやすい若者が思ひを語り合い、仕事や人生の悩み事を分かち合い、さらには覚えた技術を磨き合う、そのような職住環境を整える必要性を、三人の研修生に関わって知ったのだ。「地元で生まれ育つた者は情報も得やすく周囲の支えもごく自然に受けられるが、島外から来た人が地元育ちと同様になるには、彼らの努力と地域の「層の支えがないと成り立たない」とも語る。

目標を定めてから四年目を迎えた。また新たな漁師志願者を育てようと氣力を充実させ、北海道漁業就業支援センターとのコンタクトを続けている。



製品仕立ても重要だ



養殖コンブの水揚げ

北海道漁業就業支援センターの活動から

どうしたら漁師になれる？

北海道漁業就業支援センターは「北海道で漁師になりたい」と考える人の電話や訪問を受け、就業に関する相談事の対応を行っています。

漁業就業は、ハローワークで取扱いにくい職業のようです。昔から漁業や農業は個人で営んでいたもので、家業は子弟継承が当然でした。近年、職業選択は子供の自主性を尊重するなり、漁業も農業も世襲の意識は薄まっています。しかし一方では、就業者が高齢化し後継者もいないと産業維持が心配されている現状もあります。特に漁業にあつては縁故関係や漁業協同組合が仲介し、地域内で労働力を確保することが通例でしたから、ハローワークに求人依頼することは稀です。

さて、漁師になりたい人の動機を聞くと「海が好きだから」「釣りをしたいので」「会社の人間関係がいやになった」「解雇や定年がない」「一人で漁業をしたい」などの返答が多い。確かに海に出てしま

えば「人ですが、漁村で生活するにはその地域のルール（慣習）に慣れが必要がありますし、隣の人の名前も顔も知らない都市部と違い、人間関係がとても大切な意味を持っています。ましてや生産活動の大半が船上で、事故などに遭遇すると仲間が一番の頼りです。海の特徴や魚の生態、船や漁具の扱い方を習得しなければ漁師になれません。漁師仲間の知恵と工夫を会

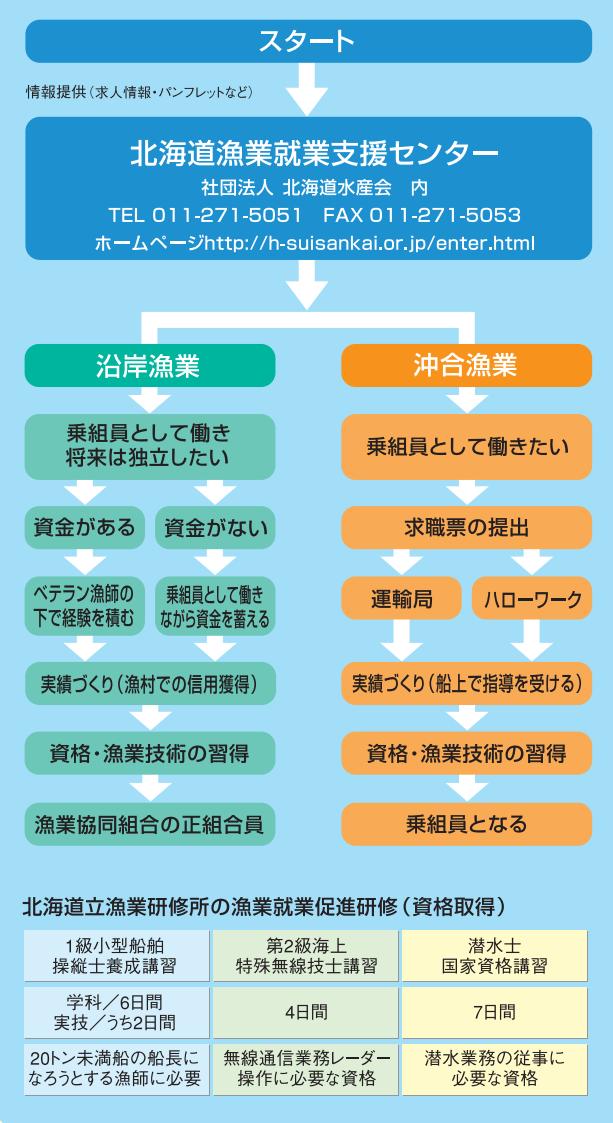
得するには謙虚さと協調性が強く求められます。

働く時間も、通常は夜半から翌朝までの操業で、翌日の準備を終えると昼過ぎになります。会社員の生活と12時間ズレています。好漁不漁もありますし、すべてが自己責任と言つても過言ではありません。漁師は価値観、生活様式、社会習慣が都市部と大きく異なることを認識することも重要です。

やがて独立して漁業を始めるには、地域漁協の組合員となり、漁船や漁具の購入、運転資金など多額の資金が必要になりますので、一定の蓄えを準備しておくことも重要なポイントです。

支援センターでは、国や道による支援事業を紹介し、また本道漁業の現状を説明して『漁師』という職業をより理解してもらうことに努めています。

『北海道で漁師になりたい』と思ったら…



新米漁師を迎えるには…

五人の就業希望者受入漁家をご紹介したが、指導担当の漁師さんが積極的・献身的に彼らの育成に努めてくれても、地域の応援・支援がなければ就業までに至らないものです。

漁業就業者の減少は、食生活の改善をすすめ食料の国内自給率向上を目指す政策の根幹を搖るがす課題です。また生産地である地域にあつては基幹産業を衰退させ、関連産業へ打撃を与えることは教育や医療機関の撤退、社会福祉施策の増嵩を招き、地域の社会構造そのものを崩壊させることが危惧されます。

道は、水産業・漁村振興施策の一つに地域における就業促進対策を掲げ、地域課題を地域自身が議論する『地域協議会』の開設をすすめています。魚価対策や流通アクセスなど地域レベルを超えた問題もありますが、地域として産業の新戦力を外部から求める場合の具体的な改善点を、地域で忌憚なく話し合うことです。住宅確保や規就業者を育成する指導漁家の確保など具体的な地元支援策と

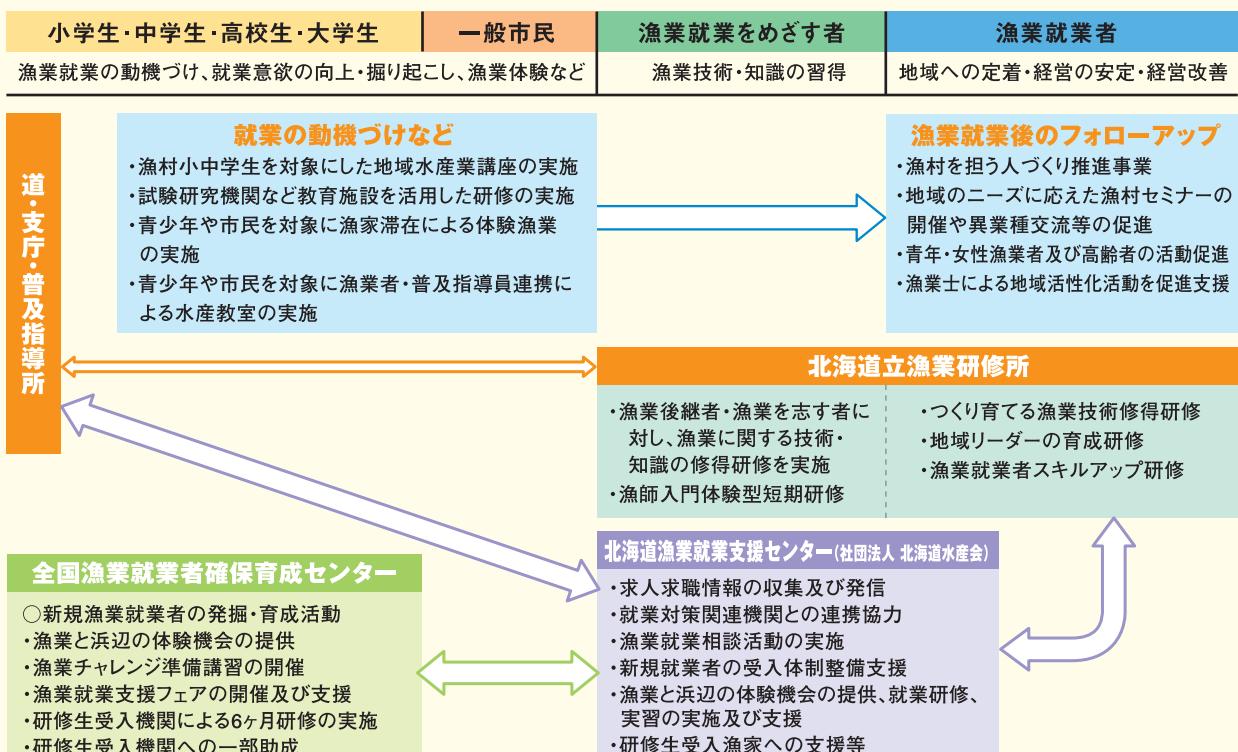
役割分担などを話し合われ、成果が現ってきた地域もあります。

このような地域での受入体制整備とともに、道は技術習得の実践研修制度を創設し、北海道水産会の漁業就業支援センターを通じて実施しています。また、道立漁業研修所では、漁業経験のない人が基礎的技術を習得ができる体験型短期研修制度を設けています。

漁業就業促進のため支援センターは、全国漁業就業者確保育成センター主催の就業希望者と受入漁協や漁師との面談会「漁業就業支援フェア」参加支援や漁村での実地研修サポート、巡回によるアドバイザー活動など漁業就業相談窓口を担っています。



北海道における担い手確保・育成対策の体系図



「北海道で漁師になろう!」サイト
<http://h-suisankai.or.jp/enter.html>



北海道漁業就業支援センター

〒060-003 札幌市中央区北3条西7丁目
北海道水産ビル 社団法人北海道水産会内
TEL:011-271-5051 FAX: 011-271-5053
e-mailアドレス fish10@h-suisankai.or.jp



<http://h-suisankai.or.jp/mobile>